

全盛期支えた三鷹

文人の
武蔵野

太宰治の文学的人生において、昭和20年前後の活躍には目を瞠るものがあります。「津軽」「斜陽」「人間失格」をはじめとする代表作は敗戦を挟んだ数年間に書かれましたが、太宰と同世代の新人・中堅作家の作品は、芥川賞受賞を含めてほとんどが時代に埋没しています。文学史家の神谷忠孝氏が提起するように、戦争を通して自身の文学を確立し得た稀有な作家と認め、坂口安吾や石川淳とともに1940年代文学と呼ぶことができます。

太宰治 ⑥



太宰がたびたび足を運んだ「三鷹跨線人道橋」(三鷹市で)

世界的な戦乱期に個人的な安定期を迎え、敗戦後の動乱期に全盛期を迎えた太宰を支えたのは三鷹の町でした。

三鷹移住後の太宰文学の多くには三鷹の影が見えます。明記している作品だけでも37作(筆者調べ)あります。「三鷹の馴染のトンカツ屋」「三鷹の薄汚い酒の店」「三鷹駅前のおでん屋、すし屋」など飲食店とともに記される場合

が多く、また「東京府下の三鷹町の、ずいぶんわかりにくい謂はば絶域に在るので、わざわざ此の家にまで訪れて来るのは、よほどの苦勞であらう」のように記述される場面も目立ちます。

実際、当時の三鷹は不便でした。それでも人は太宰を訪ねました。芥川龍之介の移住によって田端の文士村が活性化しようとして、「絶域」にあっても太宰を慕って文学が生まれれば地域も活性化します。山内祥史「太宰治の年譜」を手がかりにして住民が太宰に貸した仕事を数えると、6箇所もあります。家族以外の支援者がたくさんいたのがわかります。

太宰を中心に三鷹が共同で文学を制作する場になり、武蔵野の畑を文士村にした時期があったのです。
(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「三鷹という街を書く太宰治」

本書は、関連作品の抜粋と作品解説(「鷗」「乞食学生」「おさん」と資料篇から構成されています。資料篇の「年表」では、「三鷹があらわれた太宰治作品」の引用と略年譜が対照されていますので、太宰と三鷹の関わりがいかにかに深いかを、作品の本文に基づいて把握することができます。



(Dioの会編)